ARCHITECTURAL DESIGN AWARD 2023

presented by KMEW

未来へ繋ぐ
建築を
発掘する。

日本の建築デザインの価値を繋ぐことを目的とした新たなアワード

「ARCHITECTURAL DESIGN AWARD」

デザイン的な美しさはもちろん、街並みや景観に対する心配り、

設計面のこだわりなど建物としてのクオリティの高さを総合的に評価し

本年度ご応募いただいた数々の作品の中から

受賞作品が決定いたしましたのでご紹介いたします。

新しい建築デザインの構想にお役立ていただければ幸いです。

ARCHITECTURAL
DESIGN AWARD 2023
presented by KMEW

Contents

Judge's Comment
審査員総評

›P03　建築家３名による総評

Best Award
最優秀賞

›P05　［茨城県大子町新庁舎］
›P07　スペシャルインタビュー

Excellence Award
優秀賞

›P11　［相鉄・東急直通線 新横浜駅新築］
›P13　［OHAYOGOZAIMASUCOFFEE］
›P15　［ヒルトップ野毛山］
›P17　［壌と家］
›P19　［生活支援センターえがおII］

Special Award
特別賞

›P21　［土壁の家］
›P22　［Kaimana Farm］

KMEW Award
ケイミュー賞

›P23　［ツナグ・モノリス］
›P24　［WATER TERRACE］
›P25　［苦楽園ノ家］

同じカテゴリの受賞作品は、物件所在地が北にあるものから順に掲載しています。　設計者様の十分な検討の元、標準施工仕様とは異なる作品も一部含まれております。

Judge's Comment
審査員総評

国内外で活躍する3名の建築家による厳正な審査。

国内外で活躍される建築家3名を
審査員として迎え
500点をこえる応募作品の中から
厳正な審査を行い、
各賞 全11点を選出しました。

藤本壮介
Fujimoto Sou

壁と屋根の使い方によって
建物に多彩な表情や役割が生まれる。

全体的にとても面白いものでした。壁を中心に、一部に屋根の提案がありましたが、どれも使い方によって、本当に多彩な表情や役割が与えられることを改めて感じました。それは、建築のボリュームの「分節」だったり、部分的に使った際の他の素材との組み合わせだったり、街の中での存在感のつくり方だったり。大きく見せるのか、一部だけキラリとすごく輝くような見せ方をするのか、などです。また、大きな建物から小さな建物まで、スケールによっても表情の出方が違っていました。小さなものでは、とても親密な感じを演出されています。一方それほど大きくない家でも、非常に格調の高い表情をつくられていました。パブリックな建物では、そのパブリックな雰囲気に呼応するように表現されていました。本当にシンプルな素材ながらも、多様な見せ方、多様な建築の現れ方を、丁寧にしっかりつくりだされているのは、見ていて楽しく、大いに刺激を受けました。

Profile

1971年北海道生まれ。東京大学工学部建築学科卒業後、2000年藤本壮介建築設計事務所を設立。2014年フランス・モンペリエ国際設計競技最優秀賞（ラルブル・ブラン）に続き、2015、2017、2018年にもヨーロッパ各国の国際設計競技にて最優秀賞を受賞。国内では、2025年日本国際博覧会の会場デザインプロデューサーに就任。2021年には飛騨市のCo-Innovation University（仮称）キャンパスの設計者に選定される。主な作品に、ブダペストのHouse of Music (2021年)、マルホンまきあーとテラス 石巻市複合文化施設（2021年）、白井屋ホテル（2020年）、L'Arbre Blanc (2019年)、ロンドンのサーペンタイン・ギャラリー・パビリオン2013 (2013年)、House NA (2011年)、武蔵野美術大学 美術館・図書館 (2010年)、House N (2008年) 等がある。

永山祐子
Nagayama Yuko

日本の文化と風土が育んだ表現と
素材の組み合わせが印象的。

受賞作品をえらぶ上で「素材をどう上手く使うか」と「建築的に良いかどうか」の2つの視点で審査しました。昔、海外のクライアントに「日本の建築は、なぜグレーが多いのか」と尋ねられたことがありました。その時は答えが見つけられていなかったのですが、今回の受賞作品を見ると、日本の風土、四季、そして自然光の加減が起因していると感じました。素材と光を組み合わせた時の微妙な陰影の違いの中にあるきめ細かな差の表現は、昔から受け継がれてきたものだと改めて思いました。今回の受賞作品は、外壁に使われているもの、室内に使われているものと実にさまざまですが、例えばトップライトと組み合わせた時の質感、グラデーション感、素材が持つ陰影など、丁寧につくりだそうとしています。日本の文化と風土が育んだ表現が、この素材と上手く組み合わされているのを改めて感じながら、今回それをさまざまなバリエーションで見ることができ、どの受賞作品もとても面白いと思いました。

Profile

1975年東京生まれ。1998年昭和女子大学生活美学科卒業。1998年青木淳建築計画事務所勤務。2002年永山祐子建築設計設立。主な仕事、「LOUIS VUITTON 京都大丸店」「豊島横尾館」「ドバイ国際博覧会日本館」「JINS PARK」「膜屋根のいえ」「東急歌舞伎町タワー」など。JIA新人賞（2014）、World Architecture Festival 2022 Highly Commended（2022）、iF Design Award 2023 Winner（2023）など。現在、2025年大阪・関西万博にて、パナソニックグループパビリオン「ノモの国」と「ウーマンズパビリオン in collaboration with Cartier」（2025）、東京駅前常盤橋プロジェクト「TOKYO TORCH」などの計画が進行中。

http://www.yukonagayama.co.jp/

成瀬友梨
Naruse Yuri

設計者の皆さんの力量によって、
素材がとても活かされている。

今回のアワードはケイミューの商品を使った建築を審査するものですが、そこはあまり気にせずに、建築として素敵なもの、素晴らしいものを選びました。結果として面白いと感じたのは、大きな公共建築から小さな住宅まで、ケイミューの素材がさまざまなスケールの建築で使われていて、建築の素材としてとても多様に見えてくることでした。ケイミューの商品は人工的な素材ではあるのですが、「人工物然」とはしていないような見せ方をされているものが、最終的な受賞作品に選ばれているという気がします。木との組み合わせが上手いものであったり、「まるで石なのか?」と見間違えるような、とても高級感がある使われ方をしていたり。すごく小さな建築で、木の扉などとの組み合わせで、すごく可愛らしく見えるものもありました。安価な材料とは違って、とても質の良いものに見えるような。設計者の皆さんの力量で、素材がすごく生かされていると感じました。

Profile

1979年愛知県生まれ。2007年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻　博士課程単位取得退学。2007年猪熊純氏とともに成瀬・猪熊建築設計事務所設立。主な作品に「LT城西」「Dance of light」。主な受賞に、第33回AACA賞 優秀賞、2015年日本建築学会作品選集新人賞、第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 出展特別表彰、大韓民国公共デザイン大賞 国務総理賞。主な著書に、『シェア空間の設計手法』、『子育てしながら建築を仕事にする』

http://www.narukuma.com

No. 01 **Best Award** 最優秀賞

茨城県大子町新庁舎

[茨城県 久慈郡]

©Neoplus Sixten Inc.

株式会社 遠藤克彦建築研究所
遠藤 克彦氏

PRODUCT
外装材:SOLIDO typeM_LAP（セメント）

審査員コメント（最終審査会・表彰式時コメントより）

藤本 壮介

木造で役場を作るというチャレンジと、空間が非常にダイナミックで、建築として非常に素晴らしいところが大きなポイントになりました。この外壁材が、木の素材と隣り合った時に、両方を活かすような使い方をされていて、木が当然主役になっているのですが、背後にある壁が単なる背景ではなく、質感をしっかりと出すことで、建物全体のクオリティが作られている。その点が空間性と相まって素晴らしいということで、最優秀賞に選ばせていただきました。

永山 祐子

まず建築としてとてもダイナミックで力強い建物という印象を受けました。外壁を何にするかは色々悩まれるところだと思うのですが、こちらの建築は周りとうまく馴染んで自然な感じがします。〈SOLIDO〉の特徴は、自然の石にも似た表情で、経年変化も受け入れるという、自然物に近い商品なのかなと思います。木とバランスよくマッチして、一緒に年を経ていくような組み合わせがとても良いと思い、今回最優秀賞に選ばせていただきました。

成瀬 友梨

今回のアワードの審査基準は「ケイミューの商品をうまく使っている建築ではなく、建築として優れたものを選び、そこに自社の製品が良い形で使われていたらそれで良い」というお話を伺い、素材のことは一回忘れて、建築として審査をしました。その中で応募資料から伝わってくる力が群を抜いていたこちらの建築を最優秀賞に選ばせていただきました。完成までいろいろな歴史をたどってこの建築の力強さが生まれてるんだな、と審査員をさせていただきながら勉強にもなりました。

町民に愛される新たな風景の創出

concept: 大子町が誇れる建物をつくること、林業の町であるからこそ実現可能な、町民にとって愛着がうまれる建物とする為に、木を如何に際立たせ〝木架構が自律的に林立する〟風景をつくるかということを考えている。外装材には木材のやわらかさや軽さのような質とは「対称」である素材を選定していくことを重要視して設計を進め、〈SOLIDO typeM_LAPセメント〉は「対称」であること（=少し重さのある材料を選ぶこと）に合致する素材であったため採用した。計画敷地は周囲を八溝山系に囲まれた高台にあり、町の中心市街地を視認できる場所に位置している。2019年10月の令和元年台風第19号被災を受けて新敷地への移転となった新たなこの地での計画では、八溝山系のスギやヒノキなどの地域産材を多用する純木造を採用。日射負荷低減や風雨による影響を考慮した大きな軒面を持つ大屋根の庁舎として、大子町の自然と呼応する森のような新たな風景の創出を試みている。（応募資料より抜粋）

Best Award

最優秀賞 受賞者

遠藤 克彦氏 / 樋口 永氏

SPECIAL INTERVIEW

2023年ADA最優秀作品を手掛けられた株式会社遠藤克彦建築研究所 代表 遠藤克彦氏と設計担当 樋口永氏に、当社執行役員の藤田がインタビュー。竣工までの経緯や、建築、素材などへの思いをお聞きしました。(以下、敬称略)

樋口 永氏(左)、遠藤 克彦氏(右)

地域とともに歩む、これからの木造建築

藤田　この度は受賞おめでとうございます。遠藤さんは大阪中之島美術館のお仕事が始まった翌年、多忙を極める中でこちらのプロジェクトもスタートでしたが、当時の状況や、心情などを教えていただけますか?

遠藤　この大子町の新庁舎は公募型プロポーザルでしたが、敷地には2018年の初夏頃に実際に行きました。大阪中之島美術館の基本設計も、実施設計も、そしてコストの積算も落ち着いて、事務所として次にどう進んでいくかを考える余裕が少しあったタイミングでした。私は案件があれば、敷地を見に行ったり、調査したり自分で体を動かすタイプなので、まずは現地に行こうと。ただ、敷地をゆっくり見ることはできなかったのですが、その場の感想を車の中からスタッフに電話で伝えていたのをよく覚えています。その後、塩原、黒磯、岩手・盛岡、青森・八戸市などで街作りをいろいろ視察し、大阪に戻りました。そうして提案書を作って、ご選定いただきました。

水害リスクを考慮し、敷地変更へ。

藤田　そのときは川べりの敷地に鉄骨造ですよね。

遠藤　鉄骨造で2回設計しました。町長が変わって、建物を縮小し、コストも下げて。にもかかわらずそのタイミングで台風※1の被害にあいました。

藤田　水が引いても、もうここには建てられないと。

遠藤　台風が通過した次の日に私も現地に行きました。電車はもちろん通っていないので、栃木で車を借りて茨城へ向かったところ、濁流の跡がひどく、敷地に近づいたら泥という状況で、もう覚悟しました。町長も「遠藤さん、場所を変えようかと思う。住民説明会とかいろんなプロセスを経なきゃいけないけど、付き合ってくれる?」と。私は建築家としての矜持もありますので、「お手伝いします」と答えました。敷地を高台※2に移すには、再度ボーリング調査や、周回バスなどソフト面も考えなければならない。負担は増えるわけです。しかし、敷地を再選定する必要がありました。

藤田　あそこの敷地だけではなく、町がかなり浸水したわけですよね。

遠藤　山間部で、平らな場所はなかなか見つかりません。プロポーザルの段階では、この敷地は貸していて。その時から空いていれば、検討していたと思います。住民説明会は私も出ました。

鉄骨造から木造へ。

藤田　高台に変わったときも鉄骨で、3回目の基本設計となるわけですね。

遠藤　鉄骨造という与件でスタートしてますからね。そのタイミングで、茨城県から、大子町に木造でやらないかと打診がありました。茨城県の社会資本である山、産出される木材の利点を知事が感じていて、木造建築の補助金を拡充していく、モデルケース的な意味合いでした。

遠藤　大子町役場の方たちは、木造は高いと聞いていたから、最初はコストの心配が多く、「遠藤さんできる?」と何度も尋ねられました。

藤田　今までの大きさの庁舎が、木造で同じ値段でできますかと。

遠藤　私たちもコスト計算して、どうにか収まるという話になり、木で補助金を使用してつくっていくことになりました。茨城県林政課、大子町の方は弊社、茨城県の木材組合でうまく協力体制を取ることができたのが非常に大きいです。

樋口　茨城県として県産材普及促進協議会ができていたのは大きかったように思います。木材

を活用して普及させていきましょうという姿勢が県側に既にあったところに、我々がどう寄り添っていくか。茨城県・大子町・設計ないしは木材組合が同じ方向を向けたことが大きかったように思います。それがなければ、調達も破綻していたと思います。

遠藤　県が自分たちの社会資本である山・木材をもっと活用するために、LVLとかCLTみたいなものではなく、もっとイージーに、大断面を製材で計画できないか?ということで、積極的に誘致した側面はありますよね。

現地調達がSDGs につながる。

遠藤　例えば柱の材料、8mぐらいのものが何本ぐらい茨城の大子の山を中心に手に入るかを調べてスタートしました。

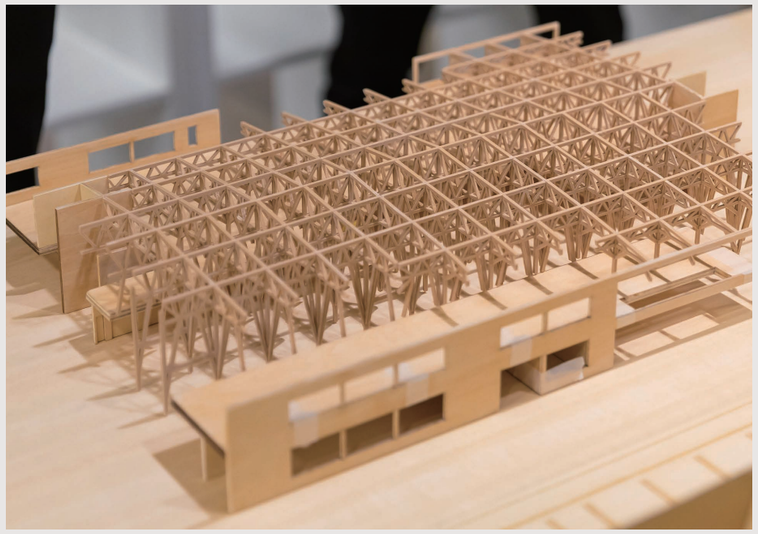
樋口　大子町新庁舎の柱は集成材ですが、製材として一番長いのは斜めの方杖材で、それが8mの原木でどれぐらい取れるかが一番クリティカルな寸法でした。後は管柱の量ですね。原木を調達する時点で、どれぐらいの長さの材料がどれだけ確保できるかをヒアリングして、物量が多いところに短い材料を使えることもわかりました。

遠藤　私たちはこのプロジェクトで、本質的な持続可能性といいますか、SDGsにかなり踏み込んだと思います。それは、やはり物を動かさないこと。近い場所の材料で建築を作る。どう調達するかを考えることも設計だと思います。調達と交渉、それから協力体制の構築、設計者は、やはりそこまで踏み込むべきだと思います。

藤田　やはり想いを一つにしないと、なかなかできないですよね。

樋口　木材組合と打ち合わせする初期の段階は、設計の考え方のようなものをプレゼンして、そこで熱量がしっかり伝わったのが、スタート地点として良かったと思います。

遠藤　最初は私たちのことを懐疑的に見てた町の方々もいらっしゃいましたが、今はとても仲が良くて。今も町に用があって行くと声をかけられて、「本当にいい役場ができて、みんな行くのが楽しくて」と言っていただけます。木の香りも全然消えていない。五感に訴えられる庁舎になっていると思います。



提供:茨城県産材普及促進協議会

(左)約1,000㎥の木材を使用して設計された、木造ラーメン形式による空間。全方位に広がる木架構の間を抜け多方面へつながる平面を、と計画された。木材現しを可能にするため準耐火建築物として「燃え代設計」を適用している。(右)地域財産を生かす木造化へ計画変更ののち、純木造庁舎をつくるにあたり、使用する木材確保の方法を設計初期段階より森林組合関係者とヒアリングを重ね調整を行い設計を進めた。

※1:2019年10月令和元年台風19号 ※2:町営研修センター(東京理科大学 旧研修センター)のグラウンド

木材のやわらかさに〝対称〟な〈SOLIDO〉がマテリアルの強さを纏う建物に

〝森の建築〟を支える構造設計。

藤田　庁舎は「森の建築」として話題ですが、この方杖の建築で、どうして〈SOLIDO〉が外壁に採用されたのか聞かせてください。

遠藤　実は4回目の設計で、RCで耐震壁を作ったことが非常に重要なのです。RCで耐震壁を作る木造の設計のときは、木の加工は軽やかな方向に向かっており、寄棟の軽やかな大屋根の建築でした。その後、やはり、県としては「純木造を作ってほしい」と。そのときに、改めて計算してもらった構造負荷の大きさ、そして壁量を見てふっ飛ぶわけですね。こんなに壁が多くなったら、全然庁舎としてのプログラムが組めない(笑)

藤田　ワンルームマンションが林立してるような状態になりますと(笑)

遠藤　そこで思考を切り替えました。壁量がこれだけ必要であればまず軽やかな建築は違う。無骨になる。無骨さに強いメッセージを持たせる方向でシステムを考えました。3.6mスケールで、木の現しの加工ができるかどうかの検討を始めて、この筋交いを上方に向けることで、かなり効く耐震要素として使えないかというアイディアが出てきました。3.6mの中にどういう角度のどういう加工が可能かというのを延々スタディして、それでたどり着きました。なので設計を5回やったことはとても意味がある。

樋口　ここに行き着くまでに、実は違う軸組の加工形式もスタディして試行錯誤しました。

遠藤　この構造計画と、素材の選定は大切で、この無骨な、非常に強いメッセージ性を結ぶ加工に対して、どういう外壁であるべきか。そこに〈SOLIDO〉がありました。

建築家に求められる、トータリティ。

藤田　表彰式で、予算の確保の話をされていましたね。

遠藤　ある議員さんと話したときに、「僕たちは中身についても詳しく知りたい。例えば、どういう素材が使われてるとか、そういうことを議会内では知る由がない」とおっしゃって。「本当はもっといい素材があって、耐候性も含め、色々検討しているけれども、決められた予算の中で決めていくプロセスはありますね」と答えたら、「そういう話を聞きたいんだよね。議会特別委員会をやるから、来て説明してくれたりするのか?」とおっしゃるので、「もちろん喜んでやります、どういう設計案ができ上がっていて、さらにどれぐらい良くできるかというお話はできます」と。もし、議会でお金の説明をして、住民の代表としての議会が、町民のためになると思って予算を上げる可能性はあるかもしれないと思っていたら、説明した後に本当に予算をつけてくれました。

樋口　そして〈SOLIDO〉が、耐候性、メンテナンスフリーということで採用できることに。忘れもしないですけど、1枚大判を持っていきました(笑)

遠藤　議会の特別委員会に、壁の〈SOLIDO〉以外にも候補の素材を全て持参して並べ、「今はこのような感じですが、予算があればこれになります」と説明すると、議会が親身に話を聞いてくださり、非常に民主的なプロセスを経て、選定していただきました。良いデザインというだけではバリューにならない。この金額で、この工期で建つという約束事が非常に多い。トータリティが問われていて、コスト・素材・耐久性等を含めて、設計をきちんとできることが重要だと思います。

ストラクチャーとエレメント。

藤田　大子町で、〈SOLIDO typeM_LAP セメント〉のグレーを選ばれたのはなぜですか?

樋口　選定する際に、木材のエイジングの風合いとなじむイメージがあったのと、もう一つは素材感。セメントそのものを使っているのが理由です。

遠藤　私たちは「建物はストラクチャーとエレメント」と言ってます。その関係を徹底的に考える。ストラクチャーは構造の話で、構成するエレメントは精製される過程においてもピュアであった方がいい。素材があるべき色、あるべき質感により近い方がいい。

藤田　エレメントは屋根・壁・床のようなものでしょうか?

遠藤　もっともっと小さい。壁なら壁を構成しているエレメント、さまざまな段階があるという意識です。

(左)待合として使用される「ふれあいホール」は、ワークショップの意見でも多くの声がでていた〝町民同士の団らんの場〟として活用されている。(中)3.6mピッチで構成された建物のため、それらに取り合う素材や設備などを徹底し、方丈の中心が目地にあたるように水平方向で割付の微調整を行った。(右)木の素材感に負けず、〝規格製品でありつつもすべてが異なる質感をもつ〟ことがマテリアルの強さを纏う建物になると考え〈SOLIDO〉を採用。

撮影:上田 宏

藤田　1個1個の部材までも、あるべき姿であるものを選定しているということですね。

遠藤　大変だったのは、寸法が910mmで建築は900mmモジュールなんです。なぜぴったり合ってるかというと、全部目地割しているんです。至るところが合っています。

樋口　〈SOLIDO〉とサッシュと方杖も、断面上で少しずつオフセットさせています。エレメントが自立するように、ミリ単位で。大子町では、現場事務所で1分の1のスケールでそれぞれ割付を出し、どういう位置にサッシュが来るか、給排気口はどこに来るのか、といったことを遠藤とやりとりしました。

遠藤　変なの持ってくるんですよ。片方から寄せたりして、そして施工側は怒りはじめる(笑)。

藤田　住宅でも、割付を考慮されているか否かで、全然イメージが変わってきますね。我々も売るだけではなく、建築の「エレメント」としてこう使ってくださいと提案しないといけないですね。

遠藤　そういう意味で、世の中により実装させていくために、やはり910mmが今後のモジュールかどうかも考えていかないといけないですね。

建材メーカーに期待すること。

藤田　長く愛される公共建築をつくるために、我々建材メーカーとして、どういうものを、どういう思想で作っていけばいいでしょうか? ある建築家には、量産型の建材でも、1個1個微妙に違うものを作って欲しいと言われました。

遠藤　僕もその感覚はよくわかる。〈SOLIDO〉の白く出ている部分、こういうエッセンスが全体にあるということが非常に良い。後から出てくると問題ですが、最初からあるといいですよね。建築は、経年変化のようなものが、良くも悪くも問われます。竣工時の状態が50年も100年ももたないんですよ。それを味というか、劣化というか微妙ですが、時間が重要だと思います。現代に生きる建築家は現代の建築しか作ることができないから、そこに現代性を刻印できる素材を欲しています。この間、欠けたミズナラの板をもらったのでテーブルを作ったのですが、欠けた状態でも物凄く良い仕上がりになった。綺麗なものじゃなく、生の状態で製材するということを私たちは意識した方がいいのではないかと思います。

藤田　割れたところを補修などせずに?

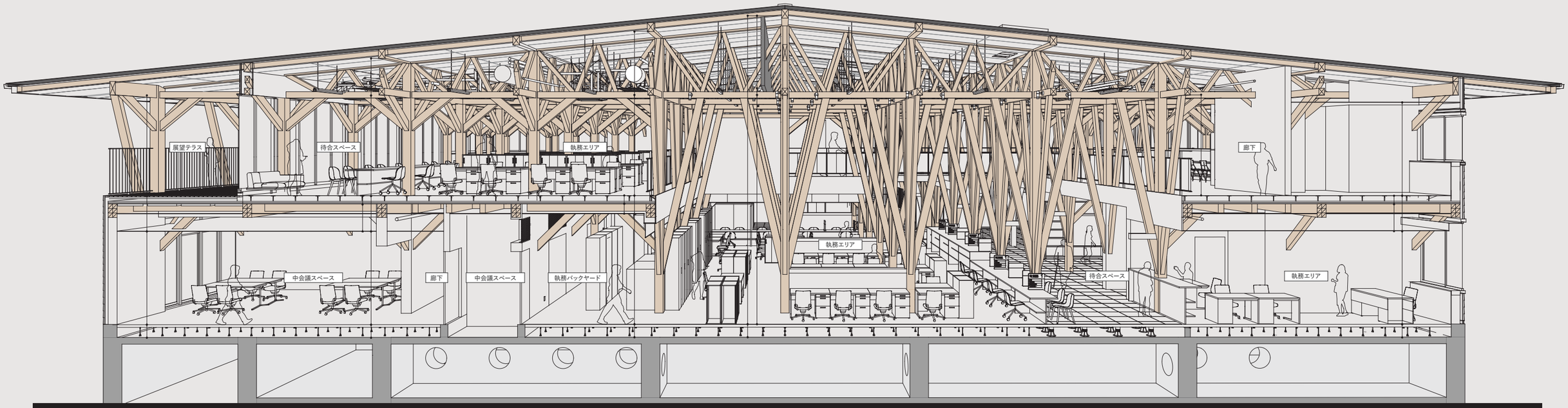
遠藤　例えば〈SOLIDO〉に穴が開いてると面白いなと思いますね。穴が開いていて、その手前にサッシュがあって、光や風が入る。

藤田　わざわざ開けたのでは意味がないですよね。今はもし欠けたりすると砕いて再利用するのですが、それはそれでエネルギーを使っているので、欠けたまま使うことができれば一番サステナブルですよね。

遠藤　もう綺麗な材料で綺麗な建築を作るということを意識から外した方がいいのかもしれないと思うんです。

藤田　環境性能が非常に高いというのは当たり前として、例えばその大地の記憶であったり、オーナーのレガシーが込められているようなものを、建材メーカーとして、品質を担保しつつ提供できたらと思います。

今日は貴重な話をたくさん聞けました。ありがとうございました。



No. 02 **Excellence Award** | 優秀賞

相鉄・東急直通線 新横浜駅新築

［ 神奈川県 横浜市 ］

株式会社交建設計
富岡 卓氏

PRODUCT
内装材:SOLIDO typeF coffee

旅行者のための 感性系ジオグラフィック

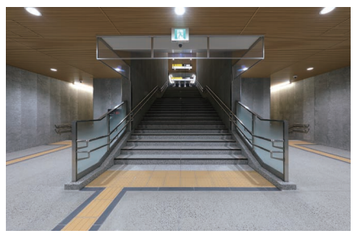
concept: 機能・防災上の要請により、空間サイズがほぼ限定的に決定された後、カンバスとして与えられた壁・床・天井にコンセプチュアルな意匠を流し込む…。地下駅にありがちなそうした設計過程が、果たして本当に利用者のための空間デザインを生み出し得るのか?という疑問が、「相鉄・東急直通線新横浜駅」の設計開始に当たっての動因となりました。グラフィカルな内装の作り込みは、それ自体に美しさやコンセプト表現力があっても、サインや設備類が更に足しこまれることで、視覚情報の断片化をもたらし、その中で行き先を探りながら移動する旅行者にとっては、却ってストレスの原因となる可能性さえあります。深度をダイレクトに表象するマテリアルのシンプルな面によって空間を切り出し、機能に即した自然光や人工光の効果を加えることで、ディティールを超えた立体物としての駅空間が立ち現れるのではないか…。そんな予見を手掛かりに、本設計は新たな試行を開始しました。ただし、単一マテリアルによる空間構成は、選択を誤ると、無機的でスケール感のない箱を生んでしまいます。そのため、クラフト感や自然発生的な風合いをもつ素材の質感、歩行感などの触感、そしてエイジングを仕上材の成長として取り込めること等を、地理的感性を喚起するための構成要素として重要な要件とし、地下壁材の候補として、〈SOLIDO〉が浮上しました。サイディングで確立されたシステマティックな納まりにより、頭上空間でも安全な大面積の壁を構成できることに加え、地下空間での運搬のしやすさ、そして何より、セメント質の白華とその変化を素材の表情として許容する、という製品思想が、今回のテーマに合致するものであったため、採用するに至りました。認定不燃材であることも、地下駅の仕上用途として不可欠なスペックの一つです 。既設の市営地下鉄によって二分され、防災上の緩衝空間をもつB1Fラチ周りコンコースには、上記空間作法を確立した上で、各方面に向かう鉄道会社のデザインポリシーが挿入され、駅入場時の地理的な手がかりを与えています。また、どちら側のコンコースにも、地層断面情報をほぼそのまま壁一面に投影した共通のシンボルウォールを配し、接続する他駅との差別化を図っています。こうした試行の結果として生み出された本駅は、地下駅に要求される各々の制約を超え、「旅行者のための空間を造り出す」という目標に少しでも近づけるものになったと考えています。（応募資料より抜粋）

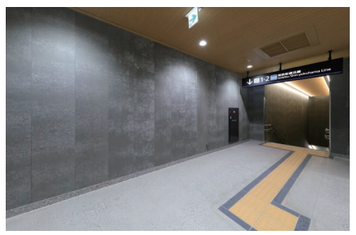
表彰式での審査員コメント

ヨーロッパなどの海外を旅行すると、こういう駅舎の空間が非常に素敵だなと感じます。その空間を彷彿とさせる上質な空間が地下鉄で実現されて、本当に素晴らしい作品だと皆で選ばせていただきました。〈SOLIDO〉を非住宅でこれだけ大規模に使って、本当に石にも見えるような、グレード感・クオリティで実現されているところが素晴らしいなと思います。このような素敵な駅が広まっていくといいなと思います。（成瀬 友梨）

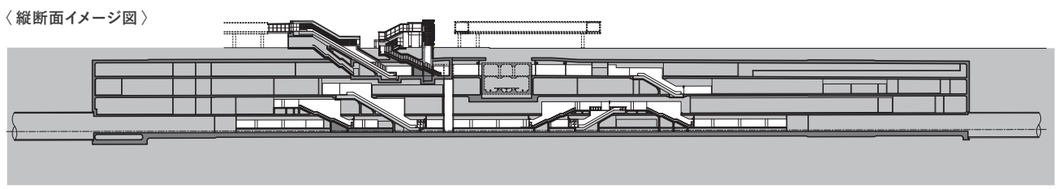
表彰式での受賞者コメント

当社は設立時から駅の設計に携っております。最初期の新幹線新横浜駅設計から約60年を経て、この地区での新駅設計に参画でき、かつ他の広い分野の建築と並べてご評価頂けたことは喜ばしい限りです。地下駅における建材は、使用環境上の理由から不燃性や耐水性を必須とした上、フリーメンテナンス性・構造安全性・長期耐久性も求められます。そのために、自ずと硬質な材料になりがちであり、選択肢も限られます。私自身も駅を使う時、設計上の合理性は理解しつつ、親しみがなかなか湧きづらいと感じておりました。そのような思いから、この駅の設計に当たっては、なるべく素の材料としての質感や触感を持ち、それぞれに自然な表情の違いが表れること、経年変化も味となること等を特徴とする材料を探しておりました。そんな折、丁度ケイミューの〈SOLIDO〉がリリースされ、材料の基本性能やコンセプトと本設計との大きな親和性を感じ、採用させて頂きました。この駅全体の中で、空間としての大きくまとまった質感を見せつつ、近接した視点で見たときにも素材の特徴を感じられて、利用者目線にも訴求する駅空間を作ることを目指したのが、ご評価頂いたポイントかなと思っています。





〈 縦断面イメージ図 〉



撮影：exp Atsushi Shiotani

No. 03 | Excellence Award | 優秀賞

OHAYOGOZAIMASUCOFFEE

［ 神奈川県 横浜市 ］

株式会社N&C一級建築士事務所
荻 逃魚氏／梶山 英幸氏

PRODUCT
外壁材：SOLIDO typeF facade

庭先から地域のコミュニケーションハブへ
2平米のコーヒースタンド

concept: 以前、住宅のリノベーションを手掛けたクライアントからの再依頼で設計した、「OHAYOGOZAIMASU COFFEE」という2平米のコーヒースタンド。クライアントはアパレルブランドでグラフィックデザイナーとして活躍されていたが、幼いころから住んでいるこの地域で商いをし、地域貢献もしていきたいという志を持っており、新たな仕事として、自家焙煎した珈琲豆で提供するコーヒースタンドのオープンを決意。その建築場所は自宅の庭先とし、職住一体とすることで、地域の方たちに身近に感じてもらうことをコンセプトとした。その庭に面して通る遊歩道は周辺の住民が日常的によく使う道で、そこに面して建つことでコミュニケーションが生まれやすく、店舗と遊歩道の間でも会話が成立する距離感を意識して配置を決定。建築としては幅2m、奥行き1mという、とても小さなものだが、コーヒースタンドに必要な機能をシンプルに整えた。基礎は地中内で既存建物と緊結し、一体の建物としている。また外壁にはシンプルな材料を使おうと考え、〈SOLIDO typeF facade〉はシンプルながら、1つ1つが唯一無二の素材感を感じられることから採用を決めた。さらに庇・笠木・雨樋・配電盤は亜鉛メッキ鋼板で統一。マテリアルを最小限に絞ることで、よりシンプルに、庭の緑の中にも違和感無く馴染むようにした。このコーヒースタンドができたことで、通る方々が店主と挨拶を交わす姿も見られるようになり、地域のコミュニケーションハブになっていくのではないかと考えている。（応募資料より抜粋）

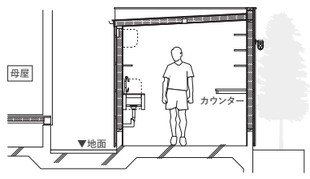
表彰式での審査員コメント

ディテールがすごくきめ細やかだなと思いました。笠木がすごく薄かったり、庇の出し方も本当に適切な深さで出ていたり。扉のはまり方も、小さいながらディテールが詰まっていると思いました。その丁寧さと、笠木も含めたすごく綺麗なディテール。こういうところを含めて、小さいけれどもすごく主張してくる強さがあると思いました。（永山 祐子）

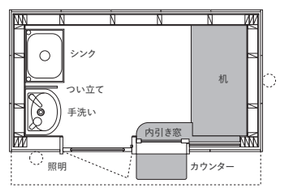
表彰式での受賞者コメント

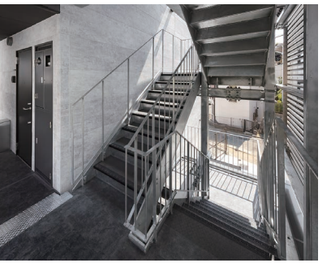
自宅の庭であること、店舗であること、この2つを両立させるべく配置・規模を決定していきました。庭であることを考えて、シンプルなデザインと、植物などと同じように経年変化していくことを材料選定の肝にし、採用した外壁材が〈SOLIDO〉でした。コーヒースタンドを新しくブランディングしていく中で、小さな小屋でもしっかりしたものを作りたい。ディテールも、小さな建築ではあるんですが、要素としては普通の建築と同じように庇があって、笠木の板金があって、建具があって、照明があって、雨樋も縦樋もあってということになるので、違和感のあるものを使ってしまうと、大きな建物よりも悪目立ちしてくる。そこで極力素材を絞って、設計しました。

〈 立面図 〉



〈 平面図 〉





No. 04 **Excellence Award** 優秀賞

ヒルトップ野毛山

［ 神奈川県 横浜市 ］

ANALOG株式会社
池田 暢一郎氏

PRODUCT
外壁材:
FLAT DESIGN PANEL
グラフィル（QFグラフィル チタン ライトグレー）
エクセレージ・光セラ16
新フラット16（フリント チタン ブラック）
（受注生産品）※地域限定商品
フィルテクト・光セラ16
ストライプ10FT（QFチャコール チタン ブラック）

CLTのメリットを存分に活かした新しい木造建築の可能性

concept: 横浜市西区の準防火地域に計画された木造3階建ての共同住宅（木三共）です。1フロアに1LDKの住戸が3戸配置された、都市型の単身者向けアパートメントとして計画しました。「都市部における建築木質化の推進」を目的として、壁及び床スラブといった建築を構成する構造材全てをCLT材で構成した、フルCLTのパネル構造として計画しています。防火性、遮音性、施工性といったCLTのメリットを存分に活かした建物をつくりあげることで、都市部におけるCLTによる木造共同住宅のプロトタイプとなることが期待されています。また設計と施工両面においてBIMを活用しています。設計検討、作図、プレゼンテーションなどの設計にまつわる業務の他、QRコードをCLTに貼り、建て方時にCLTの順番をBIMモデルを用いて可視化するなど、BIMの新たな活用方法を試験導入しています。本物件の敷地は、〝横浜都心部の丘陵地〟〝住宅密集地域（第1種住居地域）〟〝狭小で異型の敷地（約 238㎡・台形）〟〝狭い前面道路（横浜市狭隘道路に指定された道幅 3.8mの道路）〟といった都心特有の難条件が重なる敷地です。通常のCLT施工のように、大型トラックを敷地に横付けして荷降ろしができない場所であったため、事前に入念な搬送及び建て方施工計画を立て実行しました。また、CLTは素地のまま外装材として使用することができません。そのためケイミューの新商品である〈QFグラフィル チタン ライトグレー〉を被覆材として採用しました。
（応募資料より抜粋）

審査会での審査員コメント

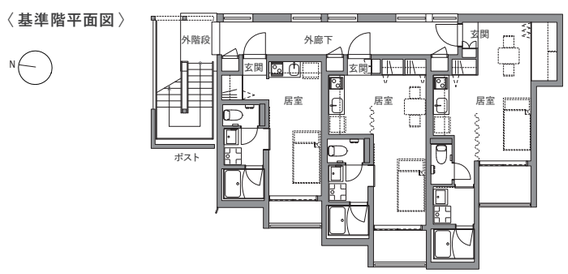
木材だったり、暗めに塗装した鉄骨材だったり、ガラスの手すりだったりと、いろいろな素材の組み合わせの中で、シンプルでさりげないけれども、クオリティを担保するような使い方をされていました。その中でいろいろと工夫されることで、素材の新しい表情だったり、使い方を発見していくような、とてもいい提案になっていました。（藤本 壮介）

表彰式での受賞者コメント

この案件は令和4年度のCLT実証事業という、林野庁主催の補助事業の一つになっています。CLTだけで構造を作るフルパネル工法で、このような案件は、CLT協会に聞いても年間5,6件、しかも首都圏では年に一つあるかないかだそうです。この物件は横浜市西区の住宅密集地で、斜面地・急傾斜地。普通ならCLTでは絶対建てないような場所に計画されています。それが実現したということで、見学会には、林野庁やゼネコンの方、大手設計事務所の方などから、大勢の見学者が来場するくらい注目されました。CLTはまだ新しい技術で、仕上げに何を使うかなどをはっきり答えてくれる人はほとんどいません。その中でケイミューの営業の方からアドバイスいただいて、新商品の〈グラフィル〉を使わせていただきました。CLTのマッシブな躯体デザインとフィットしたことが今回の受賞につながったのではないかと思っております。

撮影：梶原 敏英

〈基準階平面図〉



〈西立面図〉

撮影：山内 紀人

No. 05 | Excellence Award | 優秀賞

壌と家

［ 兵庫県淡路市 ］

建築設計事務所SAI工房
斉藤 智士氏

PRODUCT
外壁材：SOLIDO typeM_LAP（セメント）
内装材：SOLIDO typeM_LAP（セメント）

高低差と〝間〟がもたらす「人と自然が共生できる家」

concept: 施主は、親子3代にわたり、淡路島の土地で農業と牛飼いを生業としてきた。大小さまざまな土地を守り、自然と共に生きてきた孫夫婦と子ども4人の住まいである。敷地は、田んぼとして利用されており、道路とは最大1mほどの高低差が生じていた。そこで、自然・大地を敬い、これからも共に生きていく存在として身近に感じるよう、道路レベルが床レベルとなるように地面を一部掘り起こし、基礎を形成。1m近く掘削することで、田んぼの軟弱地盤を貫通し、支持地盤に到達できた。また、掘り起こした土は撤去することなく、残った敷地に盛土していくことで、床から約1mの高さが地面となり、住人が大地と容易に触れられる関係性を作り出した。この掘り起こした床に、北側実家への採光や眺望を遮ることが無い水平に伸びる屋根を設け、周囲からの視線を調整する為、外周の一部に鉄骨造を併用し、軒が深く薄い屋根をデザインした。深い軒を持つ屋根を、内部と外部に渡り配置する事で、内外の親密度を上げ、リビングやワークスペース・キッチンに大開口を設え、デスクやベンチ等を介して地面へとつなぎ、自然の恵みを享受出来る計画とした。建物中央に配置した1.5層吹抜けの土間空間を中心に、5つの軒下空間を設える。それぞれのスペースの〝間〟にテラスや通路を設けることで、独立性を持たせながら、土間空間・軒下空間と流動的に繋がる構成とした。また、この住まいには玄関が無い。多様な人を受け入れ、敷地全体を積極的に利用できるように、軒下空間の4つの隙間から外部にアクセス出来る計画としている。それにより、中央の土間空間を家族の憩いの場として利用するだけでなく、施主が作っている野菜や畜産物を利用した飲食店の客席としても活用できる可変性を備えている。床レベルを調整し、多様な軒下空間を介して内外を横断する構成と構造、さらに、コンクリート・鉄・木質・フレキシブルボード・スレート板といった無機質な素材が、人と自然の振る舞いを強調させる。自然に対して敬意を払い、大切にするという「人と自然の共生」が、暮らしの豊かさに繋がるのではないか。（応募資料より抜粋）

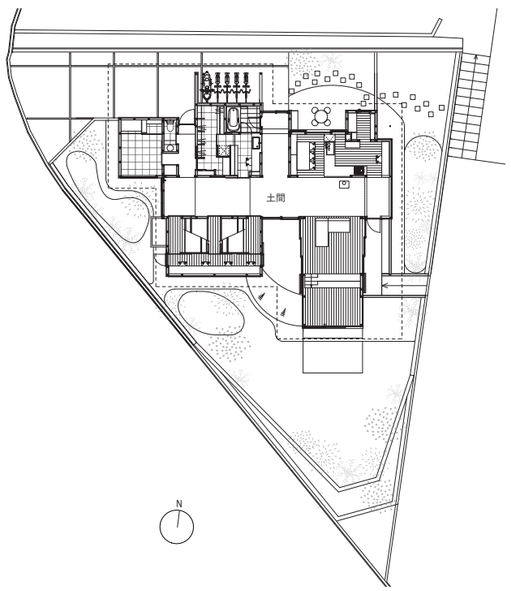
表彰式での審査員コメント

住宅の作品はいろいろありましたが、その中でも群を抜いて細やかな住宅でした。少し全体が沈み込んでおり、畑が目線に広がって見えてきて、ここでの生活を想像するととても気持ちよさそうに感じます。半分沈んでいることで落ち着き感もあり、周りから見えても、この少し下がっているところで守られている感じもある。空間そのものが魅力的で、ケイミュー商品を使った内外が連続するような表現が、この開放的な家の構成にぴったりで、使い方も「ここにこそ」というぐらい、この家の構成に合っていると思い選びました。（永山 祐子）

表彰式での受賞者コメント

もともと田んぼであった敷地と道路の高低差を背景に、地面1階を道路と同じレベルに設定。そこから各シークエンスを考えていきながら、大地・地面・屋根の水平ラインをうまく操作し、人の居場所や暮らしの営みが多様に変化できるような住宅を設計していきました。半外部であるような居場所の快適性を意識して設計していく中で、内部と外部に同じ素材を使いたいと思い、外装としても使えるケイミューの〈SOLIDO〉を中にも使っています。〈SOLIDO typeM〉は大きさがちょうどいいサイズで、空間の高さを抑えた設計において、そのスケール感にも合っていて、デザインしやすい素材でした。ケイミューのこの商品があったから、僕がやりたかった空間の操作ができたと思っています。

〈 平面図 〉



No. 06 **Excellence Award** | 優秀賞

生活支援センターえがおⅡ

［ 鹿児島県 鹿児島市 ］

株式会社エムズ・デザイン工房
宮﨑 響平氏

PRODUCT
屋根材:グランネクスト　シンプル（グラッサ・アーバンシルバー）
外壁材:LAP-WALL　Flat-フラット（グラッサ・ミルキーホワイト）

大きな庭が
まちと施設をつなぐ接点に

concept:　住宅地の中に建つ重症心身障がい児（者）とそのご両親のための通所型の生活支援施設です。医療と福祉のあいだにあるようなプログラムであり、管理的・制度的な要望を多く受けました。その中に、利用者は公園で遊んだりすることが難しいため、医療的サポートが受けられるこの施設に、公園の代替となる大きな庭が欲しいというご要望がありました。この要望に強く共感し、本計画では庭を最大限囲い取ることを重要視しました。具体的には、駐車場・車寄せ・中庭を一体的な大きな庭としてとらえ、それらをコの字のボリュームで囲い取りました。この大きな庭に自然を感じられ、活動を受け入れるための工夫をしました。たとえば、日光がよく入る中庭、雨音を鳴らす鉄製の庇、段差のない駐車場などです。そうしてできた大きな庭が、障がい者支援施設とまちをつなぐ接点となり、地域にひらかれた施設となることを願っています。また、敷地周辺は第1種低層住居専用地域に指定されている住宅地であり、2階建て程度の戸建て住宅や、3階建て程度の矩形の集合住宅で構成されていました。そこで周辺環境になじむように、戸建て住宅と集合住宅の間にあるようなボリュームとすることを意識しました。片流れ屋根をベースとしながら、一部屋根を折り曲げたことで南面には切妻屋根が現れ、道路側立面はマッシブな矩形となっています。北側隣地の戸建て住宅と南側隣地の集合住宅のボリューム感をつなぎ、街並みと連続した建築となるよう計画しました。（応募資料より抜粋）

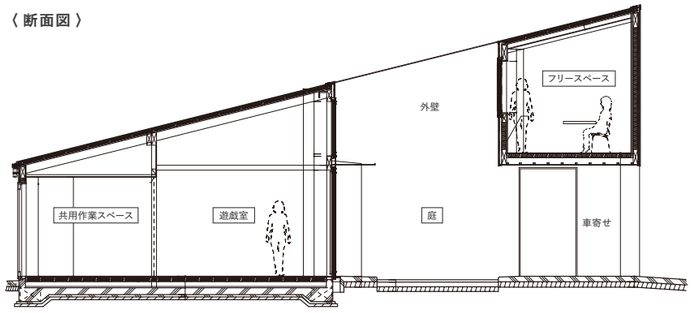
審査会での審査員コメント

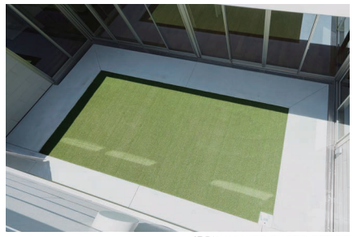
この施設は半ばパブリックな用途なのですが、あえてボリュームを分節することで、しっかりといいスケール感で住宅地や街並みに溶け込むように配慮されていると感じました。同時に白い外壁を使うことで、単なる住宅とは異なる、ある種の明るく輝くような目的地でもあるし、質の高い公共性を持った場所にもなっており、かなりレベルの高い操作をしていると感じました。（藤本 壮介）

表彰式での受賞者コメント

利用者の方はなかなか公園遊ぶことができないため、安心でき、安全な場として公園の代わりとなる中庭をできるだけ広く取ろうと考えて設計をしました。安心感を出すためにマッシブな外観にしたり、普段伏せている利用者も多いので、目に入る中庭にはできるだけ自然を感じられる仕掛けをしたいと考えました。具体的には、スチールの庇を作って雨の音を耳で感じられるようにしたり、中庭と駐車場の間にステンレスカーテンを入れて風を可視化したりしました。その一環として採用した〈LAP-WALL〉も、時刻によって影が変化するので、時間の移ろいを可視化できるひとつのきっかけになったかなと考えていて、採用してよかったと思っています。今回あまり施主としてはなかなか見慣れない造形だったと思いますが、これを承諾してくれたクライアント、この形を実現してくれた工務店の方、また施工してくれた職人さんにも感謝を申し上げたいと思います。

〈 断面図 〉





撮影：YASHIRO PHOTO OFFICE

設計者様で防水上配慮されご採用いただいた作品です。

撮影：森脇悟

No. 07 **Special Award** 特別賞

土壁の家

［ 大阪府 羽曳野市 ］

株式会社KADeL
秋山 かず子氏

PRODUCT
外壁材：SOLIDO typeM_FLAT（錆茶）
内装材：SOLIDO typeM_FLAT（錆茶 / 灰）

素材によって完全に印象づけられたファサード

concept: シンプルな造形に対してどの素材を使用するかは大きな課題だったが、自然だけが持つ独特な濃淡やゆらぎを感じられる豊かな素材〈SOLIDO〉で、昔の土壁を彷彿させる佇まいになった。経年変化もまた良いものだと感じられると思う。松の板貼り天井との素材対比もまた互いに引き立てあい効果的に。そしてアプローチ→玄関→庭へとつづく壁を〈SOLIDO〉で仕上げ、外・内・外をガラスだけで繋いでいる。分断させずに1枚壁として見せていて、訪れる人を心地良い驚きで迎えてくれる大胆な設えとした。〈SOLIDO〉によって外装と内装がリンクしひとつの作品として完結できたと思う。
（応募資料より抜粋）

表彰式での審査員コメント

一瞬平屋なのかなと思いましたが、中を見ると吹き抜けがあり、そこに〈SOLIDO〉があり外と中がつながるように作られていてすごく美しい住宅だなという印象を受けました。〈SOLIDO〉は光と組み合わせたときに、また少し違った見え方になると思うのですが、こちらの住宅は自然光のトップライトと組み合わせ、外から入ってくる光のグラデーションを〈SOLIDO〉が拾っている。商品の表情と自然光との組み合わせがすごくうまくできていると思いました。（永山 祐子）

表彰式での受賞者コメント

外壁が外から中へ、そしてまた外へとつながる一枚壁。そのガラスを貫通し、現代的な土壁のように見せたいと考えました。こちらの商品は主に内装用とのことですが、下地を工夫することで完全にフラットに施工し、外壁として一枚壁に見立てています。今回大胆な木製造作階段のあるリビングにアイストップとして〈SOLIDO〉を貼りました。この住宅の素材の中で非常に美しく一番目立つ存在になったと思います。

No. 08 **Special Award** 特別賞

Kaimana Farm

［ 兵庫県 多可郡 ］

株式会社奥和田健建築設計事務所
奥和田 健氏

PRODUCT
屋根材：グランネクスト　シンプル
（グラッサ・アーバンシルバー）
外壁材：エクセレージ・光セラ16　新フラット16
（シルバー チタン グレー）（受注生産品）
※地域限定商品
雨とい：Archi-spec TOI　AG120（マットシルバー）

山間に佇む 背の高い切妻屋根

concept: 建築主が営んでいる乗馬施設には来訪者が多い。そのため来訪者が馬と触れ合ったあとに寛ぐことができる空間をつくること。そして、料理教室もできるキッチンスタジオをつくること。あわせて、宿泊もできる住居スペースを設けることを希望された。そこで床面積はコンパクトではあるが、室容積を確保し来客者に豊かさを与えるため、天井の高さを上げた。されど、積雪への備えも必要なため、屋根を切妻状の勾配とし、本建築の外形状と内形状の特徴となる背の高い切妻屋根を構成した。そして、西へと開けている敷地形状から、夕陽を室内へと導くべく、キッチンスタジオの屋根の妻部分に三角形のハイサイドライトを設けて、空を外部と共有した。また、南側にある湖のような池を眺めたく、軒天井の水平ラインまで開口部を設けて、周辺環境と一体となるように空間を計画した。屋根は東西に長く伸びているため、平滑な横葺き状の素材での表現が適していた。そのため、〈グランネクスト シンプル〉を採用した。また、住居部分の壁は、本建築の主要な材料であるモルタルと相性のよい〈新フラット16〉を採用した。（応募資料より抜粋）

撮影：山田圭司郎

表彰式での審査員コメント

建築だけを見ると、軽井沢のモダンな別荘かなと思わせられるくらいシャープなディテールだと思いました。周りを見ると、馬小屋が隣にあり、とてものどかな風景が広がっていて、この建築が周囲から際立っていることが想像できます。地域に溶け込むような建築のあり方も素敵ですが人が集まる特別な場所として〝地域にないものをつくる〟という姿勢にも共感しました。（成瀬 友梨）

表彰式での受賞者コメント

様々な用途が緩やかに融合している建物です。屋根には〈グランネクスト シンプル〉を使いました。この商品は、実際ラップして施工しているのですが、とても平滑に見えます。屋根材自体も素晴らしいですが、今回の切妻屋根の、切妻上部の金物が大変よくできていて、エッジの金物もきれいに納めることができます。それが材料選定のポイントのひとつでした。

No. 09 **KMEW Award** ケイミュー賞

ツナグ・モノリス

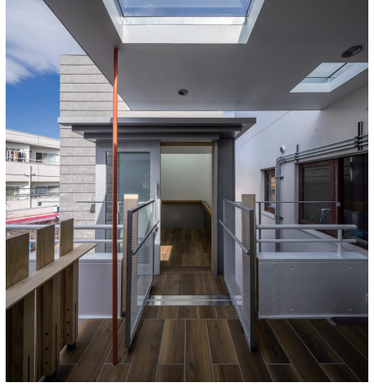
［ 神奈川県 横浜市 ］

DAT／都市環境研究室
野口 修氏

PRODUCT
外壁材：SOLIDO typeM_LAP（セメント）

質感のある素材がリノベーションの要に

concept: エレベーター棟（EV棟）新設を核とした診療所併用住宅のリノベーション計画である。RC造3階建、築45年の既存母屋は1階が診療所、2・3階が住宅になっている。EV棟は建主の高齢対策として新設され、構造的に母屋から自立する。〈SOLIDO〉を張った外観は、母屋と同化しない〝石柱〟のような表情で非建築的なスケール感を強調した。対して内観は、色調を上下階で区別し、移動の度に印象が変わるようになっている。オブジェでなく、存在意義を持つ建築装置であるから過剰な形態操作は抑え、母屋との隙間に新しい空間を創造することを考えた。1階診療所の待合から見たEV棟を背景に緑と置石を配した坪庭や、周囲の高層化でプライバシーを損なった2階ベランダがEV棟と庇により再生されたこと、木目調タイルのベランダ材をEVホールまで連続させ、母屋食堂の領域を屋外に拡張したことなどがその成果である。（応募資料より抜粋）



表彰式での審査員コメント

既存建築は白い塗装で質感や素材感が強いものではないのですが、質感がある〈SOLIDO〉を対比的に使い増築されたことが効果的でよかったと思いました。洋風でもないし和風でもない、素材感はあるけどニュートラルな素材で、意外と増築案件にも使いやすいのだなと発見させてもらいました。（成瀬 友梨）

表彰式での受賞者コメント

70年代に建った診療所建築は結構がっちり作られていて、約45年経った今、壊すかどうかが問題になっています。この建物は1階が診療所で2階より上が住居になっているのですが、独居されているお母さんが骨折され、介助無しでは階段を上がることができないため、エレベーター棟の計画を進めました。既存の建築を継続させる役割とその形から「2001年宇宙の旅」に出てくるモノリスのようだと思い、イメージに合う材料を探した結果、この〈SOLIDO〉を発見し、質感にも納得して採用しました。昨今の開発で姿を変えつつある街並に、地域の記憶をとどめた建築物を残すという意味も出たのではないかと考えています。

No. 10 **KMEW Award** ケイミュー賞

WATER TERRACE

［ 愛知県 ］

株式会社CURIOUS DESIGN WORKERS
石本 輝旭 氏

PRODUCT
外壁材：SOLIDO typeM_LAP（セメント）

外壁で囲んだ、非日常的なプライベート空間

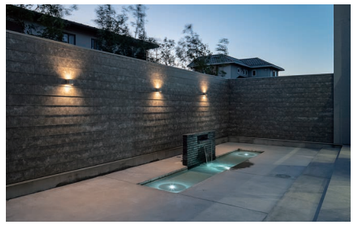
concept: 郊外の市街化調整区域で農地を転用した土地での新築計画。クライアントからはリゾート地に行ったような開放感や非日常を感じられるようにしたいという要望を頂いた。そこで、周りが畑と住宅に囲まれた立地に対して、庭を含めてLDKとテラスを外壁構造体で囲いながらプライバシーに配慮する計画とした。隣地に遮るものが無いことにより風の影響をかなり受けるため、そのまま屋外に出てくつろぐということが快適性、プライバシー性共に困難であるため、建物の外壁で視線を遮りながら風に抵抗することで、周辺の畑や住宅をあまり見せず、日常を遮断した非日常空間を実現させた。この重要な役割を果たす外壁に〈SOLIDO〉を採用することで表情を豊かにし、室内窓から見えるインテリアの一部として計画した。（応募資料より抜粋）

表彰式での審査員コメント

壁がやはり印象的で、壁が回ってきて室内に入っており、壁が建築化していく住宅で面白い構成だと思いました。外壁が作り出す室外、室内空間の「適切な隙間感」をかなり検討されたと思います。施主が希望されていたオーシャンビューの住宅を内外がつながる開放や、精神的な広がりを作り出すことで叶えられているのではないかと思います。（永山 祐子）

表彰式での受賞者コメント

クライアントから、ドラマや映画でよく見る〝オーシャンビューで青空に映え、明るく開放感あふれる家〟にしたいという要望を受けました。そこで、周りに遮るものがない市街化調整区域特有の四方からくる強い風を外壁でガードすると同時に、周囲からの視線を遮ることで、求められている開放感を実現すると共に、プライバシーの確保に努めました。窓から見える外壁をインテリアの一部と捉え、室内に取り込むというデザインは、近距離で見てもインテリアとして成立する〈SOLIDO〉の特徴だと思い採用しました。



No. 11 | KMEW Award | ケイミュー賞

苦楽園ノ家

[兵庫県 西宮市]

株式会社リブライフ
前川 智志郎氏

PRODUCT
外壁材:SOLIDO typeF facade
内装材:SOLIDO typeF shirasu
雨とい:Archi-spec TOI AG120（マットシルバー）

ブロックごとに縦横張り分けで表情を変える

concept: 閑静な住宅地に位置し、厳しい建築条件下ではあったが、敷地を最大限に生かせるよう敷地形状に沿わした平面計画とし、コンパクトながらも悠然とした面持ちを持つ建築に至る。建物中央には美しい螺旋階段を配し、シンボリックになるよう形状と色を検討。螺旋階段の鉄・床のモールテックス・キッチンカウンターのステンレス・壁のサイディング等、異素材と木を違和感なく空間（日常）に溶け込ませることに注力した。また、2方向に面するファサードには〈SOLIDO typeF facade〉を採用。街並みに馴染む落ち着いたセメント質感を全面に使用するため、ブロックごとの縦と横の割り付けに熟思した。
（応募資料より抜粋）

表彰式での審査員コメント

小さな空間の中に外と中空間がうまく組み合わせられていて、気持ちの良い自由空間を作られていると感じました。外観は打ちっぱなしや、RCかなと思っている方もいるのではないかと思うほどソリッドな塊のように見せられるのでとてもシンプルで力強いものになっていると思います。横張りと縦張りを合わせるというのもとても面白いアイデアだなと思いました。（永山 祐子）

表彰式での受賞者コメント

法規的にも厳しい角地で3階建てを建てることとなり、かなり苦労しました。和室には〈SOLIDO typeF shirasu〉を提案し、お施主様も気に入っていただき、これが外壁にも使えたら…という話をしていたところ、永山さんのトークイベントで外壁として使える〈facade〉という商品が発売されたことを知り、即採用に至りました。ただ、〈facade〉と他商品を張り分けることがなかなか難しく、悩んだ末に、縦張りと横張りを面で張り分けるデザインとし表情を変えました。

ARCHITECTURAL DESIGN AWARD 2023
presented by KMEW

https://www.kmew.co.jp/arc_design_award2023/

KMEW
2024年3月
5.1XY
第1版

ケイミュー株式会社
〒540-6013　大阪府大阪市中央区城見1-2-27 クリスタルタワー 13F
©KMEW Co., Ltd. 2024
このカタログの記載内容は2024年3月現在のものです。
24.03.08

ケイミュー株式会社のホームページアドレス　https://www.kmew.co.jp/

● ご注意：掲載物件の写真は光線の具合により商品の色の見え方が異なります。
また印刷物と実物とは色が異なります。現物の商品サンプルなどでお確かめください。

KMEW